

【書評】



「社会的存在としての財務諸表監査」

栗濱 竜一郎 著

株式会社中央経済社

平成23年1月31日刊

A5判・定価3,570円（税込）

財務諸表監査の社会的意義や役割は、監査を担当する公認会計士・監査法人や監査を受ける企業等を除き、現在においても社会の多くの人々に必ずしも十分には理解されていないのが現状である。著者は、こうした現状を踏まえ、本書において、社会的存在としての財務諸表監査を指向して、財務諸表監査に関し1つの見方を提案している。すなわち、著者は、本書において、代替的な市場観・企業観を前提に、財務諸表監査は、資本主義の中核を担う証券市場及び株式会社と社会の人々との信頼関係を醸成する1つの重要な媒体であり、また、社会を安定的に維持するための重要な社会制度（社会的装置）であるという観点から、財務諸表監査が社会に必要不可欠な存在であることを理論的に追究している。

本書は、序章、第1章から第5章までの本論、補章、及び終章から構成されている。

第1章では、財務諸表監査が成立した背景を取り上げ、そこには資本主義の中核を担う証券市場及び株式会社が存在していたことを示したうえで、財務諸表監査の基本的特性を掘り下げて検討している。第2章及び第3章では、従来の新古典派経済学の市場観及び従来の企業観に基づく財務諸表監査の見方は、財務諸表監査の社会的意義や役割などをあまりにも限定的に捉えていたことを明らかにし、そのうえで、代替的な市場観・企業観に基づいて財務諸表監査を捉えることこそが有用であると論じている。第4章では、社会的存在としての財務諸表監査が有効に機能するためには、監査人が倫理的義務を十分に果たさなければならないことを明らかにしている。第5章では、社会的存在としての財務諸表監査は、社会において必要不可欠な社会制度（社会的装置）であると主張している。補章では、以上で展開した理論を用いて、監査人をめぐる現代的課題（監査人の責任、監査報酬、監査判断と監査の限界など）の解明を試みている。こうした財務諸表監査に関する著者の見解は、財務諸表監査の社会的意義や役割などについての社会の理解や、その社会的な認知度の向上について、より一層貢献するものと思われる。

このように、本書は、監査論の研究成果だけではなく、異分野の研究成果（限定合理性、信任、制度資本など）を積極的に利用して、1つの視点から「財務諸表監査とは何か」を理論的に解き明かしたものである。こうしたことから、本書は、財務諸表監査に携わる研究者や実務家だけではなく、多くの人々に説得力のある知見を与えるものと考えられる。

以上のことから、協会学術賞に値するものとして選定した。